

展望

言葉を届ける

柴田佳美

何首かの歌をまとめて詠むときに、動詞や助動詞で終わる歌が続くと単調になりがちだ。体言で終わる歌があると、その連作が引き締まるという。今回は優れた体言止めの歌を選びたいと思う。

尾崎まゆみ編『塚本邦雄歌集』を読んだ。

てのひらの迷路の渦をさまよへるてんた
う虫の背の赤と黒 『水葬物語』

てんとう虫の色彩と比べると人のてのひらは、なんととはつきりない色合いと模様だろう。ほんのり赤い肌にうつすらと青い血管が透け、刻まれる線はさまざまな様子をしている。「迷路の渦」と想像する心も見どころであるが、やはり結句の「赤と黒」の色彩が心に残る。

他に『水葬物語』には、次のような体言止めの歌がある。

火葉庫に近き橄欖樹林には恋の時うばは
れし小鳥ら

ひる眠る水夫のために少年がそのまくら
べにかざる花台歌

一首目、火葉庫の緊張と不安から下句では

視点を移し「小鳥ら」の結句で読者を立ち止まらせる。二首目、「水夫」の水のイメージに「花台歌」が豊かな余韻となつて照らし出される。

革命歌作詞家に凭りかかれてすこしづ

つ液化してゆくピアノ

『水葬物語』の巻頭歌であるこの歌は「ピアノ」で終わる体言止めの歌だ。七音で区切ると「してゆくピアノ」で終わる。

『はじめての近現代短歌史』で著者の高良真実は次のように述べる。

基本的に区割れや句跨りは「調べ」ないし「韻律」を壊すものとして嫌われます。しかし塚本邦雄の歌では意味の切れ目と句の切れ目がずれています。この不自然な韻律をもつて、塚本は短歌的抒情の革新を試みました。

「液化／してゆくピアノ」は体言止めであるだけでなく、意識的に句跨りを使った歌である。心地よい定型のリズムからずれることで印象を深めている。

私は無自覚に、体言止めを使うことがあつ

た。体言止めは、最後に置かれた言葉の意味が強まり、余韻を感じさせる効果がある。しかし、強まり過ぎて歌の品位を下げることがある。引いてきたような考え抜かれた体言止めの歌を、心に置いておきたいと思った。

近刊からは井上法子歌集『すべてのひかりのために』を見たい。

懐かしい入り江に湊、ここ？ これは怒濤といまじめのつめの跡

火影がただの影になるまで声をあげわかれるよきみたちの来世は鳥

撫でられたあともしれずさざなみのきらめく模様すべからく、みな

一首目、「入り江に湊」とは、思いをしまつてある心中の場所であると読んだ。懐かしさとは異質な下句に展開するが、何故か読者は納得してしまう。体言止めと句跨りが心に強く残るように働いている。

二首目、火影に心を通わせ話しかけ、一般的な一度きりの命ではない者同士の凄みある世界が「来世は鳥」の体言止めで描かれる。

三首目、さざなみを詠む豊かなリズムが、読点と体言で止められて余韻が漂う。

順当に物事を述べるだけでなく、時には体言止めを使うことによって、言葉の届けかたの選択の幅が広がるのである。